

成瀬仁蔵の教育思想 — 成瀬的プラグマティズムと 日本女子大学校における教育 (博士学位論文要旨)

影山 礼子

I. 研究課題とアプローチ

近代日本教育思想史における重要な課題の一つは、キリスト教人間観や西洋近代合理主義などとの出会いにおいて、日本の伝統思想に内在する普遍的要素をすくい上げ、それを如何にして普遍的価値に向かって開かれた人格の主体の形成へと展開させ、理論化し、実践するか、更に、新しい社会変革主体の養成を試みるかということである。

近代日本において、日本の伝統思想とキリスト教、更に、W. ジェームズのプラグマティズムといった異文化、異質思想との出会いに触発された思想形成の中で、人間および社会の在り方を根源的に求め、実践的課題として教育による新しい女性の育成、即ち、新しい社会変革主体の養成を試みた例をナルセ ジンゾウ成瀬仁蔵〔1858（安政5）－1919（大正8）〕に見ることができる。本論文では、主として以下の四点を中心課題として検討することによって、成瀬の教育思想の全容に迫り、成瀬の教育思想とその実践の意義や批判を通して、彼の独自性を近代日本教育思想史に位置づけ、人間形成の根本的問題を究明しようと試みた。

第一は、本論文の主題である成瀬仁蔵のプラグマティズムを根幹とした教育思想（成瀬的プラグマティズム）の構造を明らかにするための基礎的作業として、彼の教育思想の人間観を探ることである。成瀬の生涯、彼の生きた時代背景の概略を踏まえると共に、次の二点からアプローチする。

(1) 成瀬の思想形成過程〔伝統思想→キリスト教→(ユニテリアニズム)→成瀬的プラグマティズムとしての〈帰一〉思想〕を辿り、彼の思想の伝統思想からキリスト教への転回、および、キリスト教から〈帰一〉思想への展開の際の価値の interaction の軸となったものが何なのかを検討する。特に、彼の思想がキリスト教から〈帰一〉へと展開された際のW. ジェームズのプラグマティズムのインパクトを内在的視角から明らかにする。成瀬は、彼自身が認めるように、特にジェームズの宗教を内包したプラグマティズムから思想的インパクトを受けており、この二人にはキリスト教の人間観が基盤にある。こうした二人の思想的連関を明らかにすることで、成瀬の思想形成の特質を歴史的・普遍的な課題としても検討する。

(2) ジェームズのインパクトの結果、展開された成瀬自身の変革理論(個人の変革・社会の変革)としての〈帰一〉思想の根底にある人間観の特質、言い換えれば、社会変革主体の形成の課題、および、その多元主義の構造を考察する。彼が〈帰一〉という語を援用することによって意図した意味を探ると共に、その特質をも明らかにする。成瀬は、日本女子大学校は帰一協会と同一の主義・精神で教育すること、そして、「教育に信念(真の宗教心)を離すべからず」と述べて、日本女子大学校における教育思想の基礎が〈帰一〉思想にあることを明言している。また、それは彼の日本女子大学校の実践倫理講義の真髄でもあった。それ故、〈帰一〉の分析は、彼の教育思想の根本的人間観の特質を明らかにするであろう。そして、成瀬の〈帰一〉の人間観の分析により、彼がどのような人間像を目指したのか、即ち、彼は日本女子大学校にどのような人間を生み出そうとしたのか、彼自身、日本の女性をどのような人間像へと育成していったかかったかの展望を見る。

第二は、成瀬の思想の実践である帰一協会(The Association Concordia)の検討から、その問題提起を明確にし、更に、その意義と問題点を把握することである。同協会が設立されたのは第一次世界大戦に突入する寸前の1912(明治45)年であったが、その設立の背景には、近代機械文明の行き詰まり、帝国主義の蔓延があった。日本および米国帰一協会、更に、ヨーロッパ各国

の動向も含めて、帰一的運動に托された課題は当時の世界的新思想動向であったと言ってもよい。近代機械文明が行き詰まり、その弊害が表面化し人間と社会との関係を揺り動かしている状況の中で、帰一協会が宗教を核とした基本的人間解放の在り方を志向したことは極めて意義のある側面を含んでおり、その活動の検討は国際社会の諸問題解決の糸口を示すものとして今日の意味を内包しているとも考えられる。また、帰一協会は国内外の学者・宗教家・教育者・実業家・思想家等、様々な分野で活躍した人々の相互交流の場であったが、いずれも近代日本・世界の思想を担った人達であり、彼らが同協会とどのように関わり、人間の精神的次元の在り方を模索したかは、分野・思想が多彩なだけに興味深いものである。ところで、帰一協会とは成瀬仁蔵・渋沢栄一・浮田和民・姉崎正治・森村市左衛門といずれも日本女子大学校と深く関わった人達によって設立された国際的思想交流団体であった。一方、日本女子大学校が成瀬の＜帰一＞思想を担う主体形成の場であったとすれば、他方、同協会は国内・国外を問わず社会的連帯を形成しようとする運動の society でもあった。それ故、この課題の検討は、彼の教育思想解明の手がかりともなっている。

第三は、日本女子大学校の概略を踏まえると共に、成瀬が国家の現実との関係（その要請に応えると共に、また、それへの独自の貢献の課題）を鑑みつつ、女性の真の解放を目指し、どのような新しいタイプの女性の創造的育成を試みたか、そして如何に humanism（真の人間尊重思想）に反するイデオロギーとしての「良妻賢母」思想を克服しようとしたのかを探ることである。特に、成瀬独自の「^{プラグマティズム}主行主義」（成瀬によるプラグマティズムの訳）の教育論、および日本女子大学校の学科組織・カリキュラムに見られる彼の女子教育観を分析する。更に、それらを三輪田真佐子の『女鑑』に展開された「良妻賢母」思想と比較し、成瀬の特質を浮き彫りにする。

第四は、成瀬の教育思想の日本女子大学校における実践の本質の把握を試み、更に、彼の独自の教育の結果生まれた卒業生についても考察することである。

以上の観点から成瀬の教育思想の全容にアプローチするが、第一部では、彼個人の思想について、特に人間観を中心に分析する。これは、いわば、彼の教育思想の土台（核）の分析となる。それに対して第二部では、日本女子大学の教育活動に展開された教育思想・実践を中心に分析する。それは、いわば教育という現実の場における彼の思想（理論と実践）の分析となる。本論文では、この重層的視点から成瀬の教育思想を包括的に捉えようと試みた。

Ⅱ．成瀬の思想形成過程と成瀬的プラグマティズムとしての〈帰一〉思想（第一部）

1．成瀬における伝統思想とキリスト教への転回— **selfishness** の否定（自己否定）と道徳的实践性

第一章では、成瀬が影響を受けたと考えられる伝統思想（陽明学）の人間観・倫理観のキリスト教に連結される価値を含む特色を明確にし、それが彼のキリスト教入信とどのような構造的連関があるのかを考察、彼のキリスト教理解の内実を明確にしようとした。更に、彼の牧師としての実践（大和郡山教会、新潟第一基督教会）およびキリスト教学校の教師としての実践（梅花女学校、新潟英和女学校、北越学館）の考察を通して、そのキリスト教実践の特色を把握し、それが彼の後の日本女子大学校における教育実践に継承される点を明らかにした。

成瀬は幕末に長州藩毛利家藩士の長男として出生。父・小左衛門は長州藩毛利家祐筆、官学「憲章館」の教授であった。成瀬を育んだ思想を考慮する時、彼は幼年時代に徹底した武士的教育を受けたので、彼の土着的伝統思想は儒教に存する。しかし、①当時の日本の儒者は一般的に朱子学と陽明学双方を修めた、②父も成瀬が学んだ従兄・前原膳馬（後にキリスト者となる）も陽明学派の人であったと伝えられている、③同郷（山口県吉敷村）で同じ

精神的雰囲気の中に育ち、成瀬の父や従兄から学んだキリスト者・沢山保羅^{サワヤマボーロ}が自ら陽明学がキリスト教入信の思想的背景であったことを明言している、④先行研究（武田清子教授）で、初期プロテスタントの中には陽明学の背景からキリスト者となった例が指摘されている等の点を考えると、成瀬の基盤となる思想として陽明学は大きな意味を持つと思われる。成瀬が直接的に陽明学を学んだか、あるいは、それを自覚したかどうかは不明であるが、父や従兄・沢山といった彼に影響を与えた教師達の考え方、即ち、日常の生活倫理、ひいては人間の天より授かった良心、利己心の戒め、内面的な自己規律、知行合一などを重要視する価値観などについての考え方の特質は、中江藤樹の例に見られるように、陽明学のキリスト教に連結されうる価値を含む特色を有していたと言える。

成瀬は、1877（明治10）年、19歳の時、大阪・浪花教会（組合派）にて沢山保羅より受洗、キリスト者となった。翌年、日本最初の独立自給主義に立つキリスト教主義女学校である梅花女学校創立に関与し教師となる。1884（明治17）年には新島襄、J. デフォレスト（J.H.DeForest）等から按手礼を受け大和郡山教会初代牧師となる。以後、新潟第一基督教会初代牧師となると共に新潟英和女学校を創立、初代校長となる。更には、北越学館の創設に尽力し理事となる。こうした成瀬の経歴からは、彼の関心が一貫して宗教と教育の実践による社会改革（救済）にあった点が指摘できる。

成瀬の場合は、土着的伝統思想の中の人間を超えたものに向かう志向と母・父・弟の死に起因する人間の死と救いの問題とが相まって、沢山との出会いを機に、それらがキリスト教への入信にと結実することとなる。従って、彼は沢山と共に過ごすうちに、漸次、土着的伝統思想の内容を革新し内面化する過程をとるが、信仰が進むに従って、超越者の前に存在する自己の罪深い本質を認識させられ、自己の罪から解き放たれる契機としての救世主なるキリストにと、彼の信仰は凝集されていった。そこでは、成瀬の中で、土着的伝統思想の中にあった超越的普遍概念は、キリストの活ける人格に立脚した三位一体の神の信仰へと、明確に転回させられ、改心に到る。端的に言え

ば、成瀬のキリスト教理解の第一の特質は、神と人間との関係において人間自身の原罪の自覚（「自己否定」）とキリストの十字架の愛による新生、第二の特質は人間と人間との関係において他者を尊重する（「愛他」、第三の特質は道徳的实践性、即ち、信仰を行動に現わすことによる現実生活の改革にあったと言える。確かに、成瀬の思想が伝統思想からキリスト教に転回する媒介となったものは「selfishnessの否定」および道徳的实践性であった。その意味で、彼は伝統思想からキリスト教への連続感の中にキリスト教に入信したと思われる。しかし、非連続面として、成瀬自身はキリスト教入信により絶対的・超越的人格神と自己との内面的出会いを通して、神の前における自己否定に目覚め人間の罪深さの自覚を内部に焼き付けることとなったことを指摘しておく。この点において、彼は神に応答することにより生まれる新しい主体的人間である、と同時に、彼自身常に罪をおかす可能性を自己の内部に持っているということを自覚した。そして、彼はキリスト教により、絶対的・超越的人格である神の前に罪人として人間は平等であると認識したのである。こうした神の前における自己否定の徹底は、彼に愛他の精神にも目を開かせることとなった。従って、成瀬の思想的基盤の根底には、確固としてキリスト教における罪なる人間の自覚と他者と共に生きる姿勢があったと言える。

ところで、成瀬が男性でありながら生涯女子教育に献身する決心をした動機には、彼のキリスト教への回心、それによって得られた女子教育の体験、および、外国人宣教師との人格の触れ合いがあった。沢山との出会いを契機に故郷を出た成瀬も、沢山や当時の若者の例にも見られるように、当初は長州藩出身ということから多分に世間的立身出世の理想を抱いていたと思われる。また、彼自身「男子で女子教育をやることが、果たして可能であろうか」と幾度となく悩んだようでもある。しかし、漸次信仰が深まるにつれて、その世間的理想が転回・純化させられ、それはキリスト教伝道とキリスト教主義教育（特に女子教育）へと確信をもって凝集された。この頃の彼は外国人宣教師から「聖書を持つ青年」と称せられていたが、聖書の言葉「だが、

賢い妻おんなを見つけることができるか、彼女は宝石よりもすぐれて尊い」(箴言 31 の 10) は彼の女子教育の動機ともなった。当時の日記では「余を神へ選ンデ女子教育ニ用ゐん為めに、前より定め玉ふるを知る故ニ、此の事も常ニ忘る可らず」と、キリストによって導かれた自己の使命として女子教育への献身を絶えず確認している。この確固とした信仰に導かれた動機に基づいて、彼は時に伝道活動を主とし、時には教育活動を主として、総体的には、教育と宗教の両側面からキリスト教実践を試みた。

ここで、彼のキリスト教主義教育の特質をまとめてみると、①キリスト教信仰に基づくこと、②経営が日本人による独立自給であること、③宣教師との協力、④自発主義である。この特質は、その後の成瀬の日本女子大学校における方針に、その基本的姿勢は引き継がれていると考えられる。即ち、日本女子大学校においては、①特定の宗教を表面には出さなかったものの、彼がキリスト教を根幹とした信仰を教育の土台としたこと、②経営面では財閥等からも寄付を仰いだが、日本人によってのみ財政的支援を受けている、③教育面では、英語教師・寮監として女性宣教師の協力を求めた、④自発主義をとったからである。

2. 成瀬におけるプラグマティズムのインパクト

第二章では、渡米しアンドーヴァー神学院・クラーク大学に留学(1890 - 1894)した成瀬が当時のユニテリアニズムをめぐるアンダーヴァー論争の思想的影響もあり、彼のキリスト教信仰の質が、それを媒介あるいは契機として、ある程度ユニテリアニズム的傾向へと展開することに注目する。その際特に、彼の思想がキリスト教から彼独自の〈帰一〉へと展開し、W. ジェームズのプラグマティズムのインパクトを積極的に受け止めるプロセスを明らかにした。

成瀬はアンドーヴァー神学院(Andover Theological School)では、神学を深めるよりは、むしろ当時としては新しい科学であった社会学を中心に学んだ。特に、社会学者・神学者として、且つ、全米社会運動の指導者であっ

たタッカー博士 (W.J.Tucker) に師事、研究面・生活面で恩顧を受けた。夏にはアメリカ会衆派 (組合派) 伝道者ムーディ (D.L.Moody) の夏期学校に出席したり、孤児院長カミインを訪問したりして、その感化力ある祈りに感動した。アンドーヴァー神学院在学中に自己の社会的使命、即ち、女子教育を通した社会改良に目覚めた成瀬は、その後クラーク大学 (Clark University) に移り、教授養成機関である教育学研究科に学び、主に女子教育をテーマにして研究した。同大学初代総長スタンレー・ホール (G.Stanley Hall) は、特に留学生である成瀬に研究上の種々の便宜を与え、学位を取得し学問の道に進むことを勧めてくれた。しかし、成瀬はこれを辞退し、帰国までの約1年間、諸機関の実地調査等に専念した。特に、女子大学、男女共学の大学を中心に身体障害者教育、社会福祉事業をも視察すると共に、これらの諸機関の指導者、宗教家、教育者と面会し意見を交換した。

米国では18世紀半ば頃よりヨーロッパ合理主義の影響とカルヴァン主義に対抗する米国のヒューマニズムの台頭により、東部地方にはユニテリアンの傾向が増し、殊に会衆派の中に分裂を引き起こしていた。その後、ウェア (H.Ware)、チャニング (W.E.Channing) 等の有力な論陣を得てユニテリアン教会はその数を増し、カルヴィニズムの正統派教会から排斥されアメリカユニテリアン教会を作るに至った。彼らは神観においては人間の魂の神との一致を協調し、人間観においては人間の理性は神より与えられたものとして理性や良心の自由を強調、また、科学・哲学などを重視すると共に、比較宗教学、多様な文化・宗教の人々との fellowship への関心を強めた。このような背景の中で、成瀬留学中の19世紀末期に、彼の在籍したアンドーヴァー神学院では、その教授たちを中心に論争がまきおこされていた。その論点は、端的に言えば、福音の光を受けないで世を去る異教徒は未来において救いの光にあずかる機会があるかどうかという点であった。教授たちの主張の中には自由主義神学の傾向、即ち、神の内在性、進歩の教理、聖書批判の権利、人間教育の可能性といった主張が含まれていた。従って、これらの主張はキリスト教正統派教義の中心である三位一体の神観とは異なり、神の単一性

(unity) を主張し、イエス・キリストの神性を否定するユニテリアニズムの主張であるとも言える。この論争では成瀬の師・タッカーも弾劾されたが、結果的には教授側の主張が認められ、以後、会衆派神学校における思想的自由の傾向は増していった。

当時、成瀬も留学生として、この論争の渦中であって影響されたのか、その神観・聖書観に少しその傾向がみられる。成瀬には自覚的・積極的にユニテリアン運動に参加した意識はなかったようであるが、彼のキリスト教信仰の内容は、理論的にはキリスト中心のユニテリアンの傾向が認められる。即ち、彼の信仰はキリスト中心ではあるものの、神の単一性の主張、合理主義的・自由主義的な特質をもっていた。このようなユニテリアニズムの媒介によって、以後、成瀬はジェームズ (W. James, 1842-1910) と出会い、特にその著 Pragmatism のインパクトにより、自身の教育思想(「帰一」)の理論的根拠を得た。

成瀬がジェームズと最初に出会ったのは米国留学中である。帰国以来、デューイ (J. Dewey) とは交流があったものの、ジェームズとの直接的交流は途絶えている。そして成瀬が帰一運動のため 1912 (明治 45) 年に米国を再訪問した際には、ジェームズは既に他界していた。しかし、1907 (明治 40) 年 5 月にジェームズ著 Pragmatism が出版された時には、成瀬が同年 11 月から 12 月にかけて、日本女子大学校実践倫理講義で一早く「^{プラグマティズム}主行主義に就いて」と題した連続講義を行ったことは、彼がジェームズのプラグマティズムの理論に強く共鳴したことを示している。勿論、成瀬はジェームズの殆ど全著作を所蔵していたが、当時の記録によると、この講義において彼はジェームズを最も重要視した。成瀬はプラグマティストの中でも、とりわけ、ジェームズの宗教性、即ち、有神論的プラグマティズムに共感したと言える。

ところで、成瀬の思想的変容過程における特色は、連続性にもあり、宗教と科学ということでもある。何故なら、彼の思想の変化の軸は一貫して超越的なものと対峙する宗教意識とその道徳的实践性にあったからである。周知のように、ジェームズのプラグマティズムの主な特質は「科学と宗教」「思

想と行動」の総合的観点であるが、この点にこそ成瀬がジェームズの思想に共感した原因があった。何故なら、成瀬留学期の19世紀末の米国思想界の主な特徴として科学思想の発達があげられるからである。とりわけ、彼が「(アンダーヴァー神学院在学中の頃)私の宗教思想に大なる変化を持ち来した力は科学である」と告白していることは注目に価する。実際、キリスト教→<帰一>へと彼の思想が、ユニテリアニズムの他思想に開かれたキリスト教思想としての特質に影響を受け、そして、それを媒介に、更に、ジェームズのインパクトにより transform された際も、宗教とその道徳的実践性が軸になっていたことは、成瀬がジェームズのプラグマティズムを「主行主義」「信仰を破らずして進歩の道を開くもの」と解釈したことからも読み取ることができる。

教育を通した社会改良者としての自覚を持つと共に、キリスト教の基盤に立ちながら広く諸思想への開かれたアプローチに関心を持つ成瀬は、特に、ジェームズのプラグマティズムの人間論とその実践的行動的性格および科学的思考法に共感した。とりわけ、彼がジェームズから受け止めた点を簡単にまとめると、それは「神と人間」「人間と人間」の各関係概念の調和的關係の捉え方である。即ち、成瀬自身の信仰に立つ生き方—キリスト教の地盤で培われた「自己否定」と「愛他」—に関わる人間把握の根本問題につながるものとして、ジェームズの次のような思考法があった。即ち、彼が(a)人間と超越的神との関係において、人間の意志を認める、と同時に、それは超越的神の理想へと導かれるものであること(神と人間の調和的關係)、(b)人間と人間の関係において、価値の多元論的観点に立ち個人の思想の自由を尊重する、と同時に、他者の立場の無視ではなくて自他の協調(人間と人間の調和的關係)、ひいては価値目的の究極的一致を彼方に展望するという点である。従って、ジェームズのこの思考法は、有神論の下に人間の主体の確立、と同時に、その主体と他との協調の上に価値目的の究極的一致を目指すものである。当時の国内・国外共にイデオロギーの対立が深まった状況下において、成瀬自身、教育による人間改革・社会改革を進めていく中で、個人

の主体性の確立、と同時に、その主体と他との協調による人類社会全体の進歩ということが大きな課題となっていた。それ故、ジェームズの主張・立場は、成瀬の関心に丁度焦点があっていたのである。端的に言えば、成瀬はジェームズの間人論および価値の多元論に共感し、且つ、当時の日本の学生の停滞的・受動的思考と在り方を進歩的創造的主体として変革するために、プラグマティズムの概念‘postulate’（成瀬の訳は「要求假定」）を自身の教育論に適用した。また、この二人には、①超越者に照らし出される自己の認識という意味で人間の主体性を把握したこと、②他者の価値を寛容に認め自己を絶対化することを排斥し協調の態度をとったこと、③道徳的实践性を重んじるという点で共通性があった。成瀬はジェームズの影響を受け、以後、キリスト教信仰に立ちながら成瀬独自のプラグマティズムを展開していくこととなる。それは、教育論における「主行主義」であり、思想運動としての〈帰一〉思想であった。

3. 成瀬的プラグマティズムとしての〈帰一〉思想への展開

第三章では、ジェームズのインパクトの結果展開された成瀬の〈帰一〉思想の根底にある多元主義および人間観の特質、個人の変革・社会の変革を含む変革理論の構造を分析する。彼が〈帰一〉という語を援用することによって意図した意味を探ると共に、その特質を明らかにすることにより彼の教育思想の土台となる根本的人間観の特質を究明することを試みた。そこから、彼がどのような人間像の育成を目指したのかを展望した。ここでは更に、成瀬の思想の実践である帰一協会の検討から、その問題提起を明確にし、その意義と問題点を把握した。その際、成瀬と共に同協会の主要メンバーであった渋沢栄一との比較的検討を通して、彼らの〈帰一〉の理解の差異を探る。

〈帰一〉の語は成瀬が‘Concordia’と英訳したことからも推察できるように、「一致」「調和」「協調」「harmony」の意で一元を彼方に据えながらの多元主義、多元的価値のバランスを保持した思考法を示唆する語である。彼がこの語を援用することによって意図した意味は（a）個人としては、超越

的存在と対峙しそれに応答する人間、(b) 社会関係においては、超越的なものに向かう人間（国家・宗教組織など団体も含む）の協調の二点に基づく人格および人類社会全体の向上・改善・進歩を追求することであった。従って、成瀬の＜帰一＞思想は当時の現実社会の上からの秩序の不十分さの問題性の認識と神の下に秩序ある彼の理想的世界像とのギャップを埋めるものとして提示されたと言えよう。そして、彼は日本女子大学校において、その目的を押し進める運動主体、即ち、＜帰一＞に至ろうとする主体の育成を目的としたと思われる。また、成瀬が1912年に発足させた帰一協会は、国内・国外を問わず社会的連帯を形成しようとする運動の society であったが、成瀬個人がその運動を通して真に目指したことは、(a) 宗教が人間社会の進歩の根本であること、(b) 宗教によって対立の克服・調和・自他の共同・「selfishness の否定」がなされ得ることであった。このように、彼の最も根本的主張は人間の内的な問題であり、彼が、「自己否定」と「愛他」を人間観の根本に据え、他者とのつながりを重要視していた点において、成瀬の＜帰一＞思想はキリスト教に根ざしたプラグマティックな性質をもつものであったと言える。彼は人間の内部にある「卑しき我」「卑しき動機」にこだわり続けると共に、現実社会の‘selfish’な面を問題とし続け、それを克服せしめるものに、彼の＜帰一＞の基礎を見いだそうとしていた。これこそ人類にすぎ得る根本的基盤であり、成瀬はそれを＜帰一＞の根底にもっていたのである。

更に、成瀬はキリスト教信仰に自らの基盤を置きながら、異質思想に向かって開かれ異質思想と連帯する多元的思想運動としての帰一協会を、日本国内で渋沢栄一・浮田和民・姉崎正治・森村市左衛門等と形成し、1912年より1913年まで＜帰一＞の国際的運動のため主に米国・イギリス・フランス・ベルギー・ドイツ・イタリアを回り、エリオット(C.W.Eliot)・デュイ(J.Dewey)・ベルグソン(H.Bergson)・オイケン(R.Eucken)等を含む世界各国の代表的思想家・教育者等をメンバーとする運動を組織する。この運動はキリスト教正統主義の立場からは原理的曖昧さを伴うものであった

とはいえ、明治末期から大正期にわたる時期の、国内的には思想的・イデオロギイ的対立、国際的には帝国主義的利害の衝突が激化する中で、調和・協調・平和を追求する思想的課題を担った試みであった。

成瀬と渋沢の帰一協会は、二人の社会的連帯の目的から演繹された運動団体であるが、両者の姿勢には、①異質思想を排斥しないで開かれた姿勢をとった、②宗教・道徳による人類社会共通の基盤を模索した、③自己の思想（「帰一」）を行動に現わした、④諸思想との対話・国際交流を重視した等の共通点が見られる。他方、両者の間には＜帰一＞の掘り下げ方の視点・方法に若干の相違が認められる。成瀬のそれは、人間が絶対的実在的神の琴線に触れて相呼応し究極的にはこの唯一神によって統合される（＜帰一＞に至る）との彼の信念に基づいていたのに対し、渋沢は、道徳即ち「人の履むべき道」を異質思想・文化を貫いて必要と考えていた。要するに、成瀬が「進歩」「進化」（繁栄・平和）の根本エネルギーを神に求めたのに対し、渋沢は経済発展を目指す活動の中に道徳性の必要を感じていた。

Ⅲ. 成瀬の教育思想と日本女子大学校における実践（第二部）

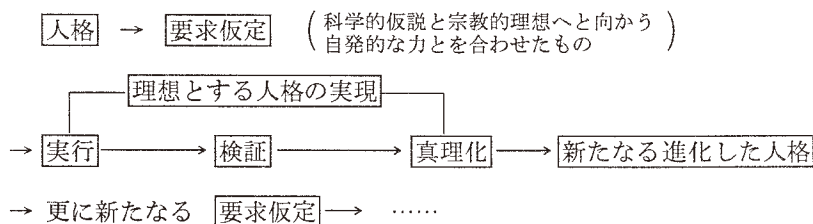
第二部では、成瀬独自の「主行主義」（プラグマティズム）の教育論および日本女子大学校の学科組織・カリキュラムに見られる彼の女子教育論とその実践を検討した。特に、当時の国家主義的イデオロギーの女性版「良妻賢母」の女子教育観と成瀬のそれとの対比、および、彼の「主行主義」の教育論と日本女子大学校における彼の教育実践との相関関係に注目した。更に、彼の独自の教育の結果生みだされた様々な分野から社会改革を試みた多数の卒業生の中、ここでは社会事業（社会福祉）の分野で活動した3名に焦点を当て、その業績を明らかにすると共に、彼女らの活動と成瀬の教育論との関係を考察した。

1. 成瀬の教育思想における方針論と方法論

第一章では、成瀬の「主行主義」に基づく教育の方針、即ち、主体形成原理、「神の愛」による社会共同の原理などを含む教育原理の構造を分析する。また、彼の実践倫理講義に見られる彼独自の教育方法（「印象・^{インプレッション}・^{コンストラクション}・^{エクスプレッション}」の学習法）、宗教的生命（「信念」）の養成を考察した。

成瀬は宗教を内包した W. ジェームズのプラグマティズムに共感しそれを「主行主義」と訳し、その原理を（１）主体形成原理、（２）社会的共同の原理として教育に適用した。

（１）「主行主義」とは「人間の外から受けた経験と、内から発する経験との全体をまとめて、その間の統一を計る」もので、「人間の内から発する経験」とは成瀬が「要求仮定」（postulate）と呼ぶものである。これは、科学研究における仮説に宗教的理想へと向かう人間内発のエネルギーを付与したものである。即ち、この成瀬による主体形成原理は人間の力強い内発的な宗教願望と科学研究法を統合したもので、



という仕方で、螺旋階段を昇るように人格形成を進めていくというものである。但し、究極的目的に向かつての進化である。

（２）成瀬の思想的構造の最大の特徴は、「関係」概念の「調和」、即ち、諸概念の総合的観点にあるが、彼の「主行主義」の教育の営みにおける社会的共同の原理の根幹は、神と人間の「調和」である。その特色は、両者の「調和」を説き人間の力に大きな比重を置きながらも、神に絶対的權威を認めて

いた点である。成瀬にとっては神は人間の自発的活動および人間相互の共同の根拠であった。彼の思想の特色は多様なものを個として生かしながら全体のハーモニーを保つという点にあるが、それは「神の愛」により究極的になされ得るとの彼の信念に基づいていた。成瀬にとっては、神の「愛」こそは人間の‘selfishness’を超えしむるものであり、それは「自己否定」を通して「愛他」へと導かれるものであったからである。

このような成瀬の「主行主義」の二つの教育原理において、その特質を簡単にまとめると、①「科学と宗教」および「思想と行動」の総合的観点、②自己の「要求仮定」（「宗教的要求仮定」）を行動に現わす、③神に照らし出される自己の認識を持った上で人間の主体性を認める（神と人間の相互関係的認識）、④他者の価値を寛容に認め自己を絶対化することなく人類社会全体のため共同の態度をとる（個と全体の関係認識、「自己否定」と「愛他」）という点である。当時の彼の教育の課題は、a) 明治期において抑圧された人間を解放し個的主体を確立すること、b) 国家の経済的發展を期すること、c) 世界の平和を実現することの三点にあったが、この成瀬の「主行主義」の特質、即ち、信仰と科学による研究力およびその実行力、信仰による共同の態度は、個的主体の確立と国家の経済的發展、各国家の経済的發展と人類世界全体の平和を調和的に結合させ得る道を追求するものであったと言える。従って、彼の意図は、「主行主義」の教育によって当時のような過渡期の時代・対立の時代の現実社会の課題を克服するような新しい人間像の養成であった。そこで、彼の教育の目的は、信仰と科学的創始力・行動力とを合わせ持つ人間、即ち、主体的、調和的人間（「有用なる活人物」）の育成にあった。

日本女子大学校における成瀬による実践倫理講義は、彼の教育方法の中心であり全体必修科目であったが、この講義の中、彼の教育思想の発現としての「主行主義」の目的から演繹された方法論として、とりわけ注目すべきものは「印象・構成・発表」の学習法と宗教的生命の養成である。成瀬独自の学習法として提示された「印象・構成・発表」の学習法は、同校の教育方法の根本原理とされたものである。「印象」とは受容の意味で真理の材料とな

る知識を外界から受け入れること、「構成」とは自己の精神内で知識を整理し考えて分類または総合し仮説をたてること、「発表」とはそれを言語・行動・作業の上に現わし真理化することである。この学習法の手段として、①英語が全学必修科目となる、②「自然研究」の科目（園芸・農業・養鶏・牧畜科等）が置かれた、③学生自治組織が結成された。

成瀬の実践倫理講義の主眼は「不滅不動の精神力」と「行為の動力」、即ち宗教的生命の養成であった。これは成瀬が「信念」と呼んだものであり、「信念徹底」は日本女子大学校の教育理念（「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」）の根本である。この講義は諸宗教の土台となる宗教的生命を養うことを目的としたが、むしろ神学的把握といったアプローチではなく哲学的思想的アプローチでの教説が多かった。彼がこの講義でとりわけ重要視したのがジェームズであった。また、成瀬は、a) 絶対者と人間の相互関係的認識、b) 西洋的と東洋的双方の意味で meditation を重視する、c) 宗教の形式ではなくその機能・働きを重視した。なお、学生による具体的実践例としては、寮舎での毎朝起床後 15 分間の「^{メディテーションアワー}瞑想時間」、各種の修養会、軽井沢における夏期寮（成瀬が米国留学中に参加したマサチューセッツ州ノースフィールドのムーディーの夏期学校がモデル、「天職」を自覚する修養会）などがあげられる。更に、この成瀬の宗教的生命の養成の同校における学科組織の発現としては社会事業学部の創設があった。成瀬の教育の主な関心は社会改良にあったのであり、彼は女子総合大学構想の中で、宗教学科（文科）の中の社会学科として社会事業教育の実現を図った。それは第二代校長・麻生正蔵によって実現された。

2. 成瀬の女子教育観の特質

第二章では、日本女子大学校の創設〔1901（明治 34）年〕の経緯（キリスト者の他に伊藤博文、西園寺公望、大隈重信、渋沢栄一、森村市左衛門ら当時の政界・財界の有力者らの支持をも得て）およびその概略を踏まえると共に、成瀬が国家の現実を鑑みつつ、女性の真の解放を目指し、どのような

新しいタイプの女性の創造的育成を試みたか、そして真の人間尊重思想としての humanism に反するイデオロギーとしての「良妻賢母」思想をどのように克服しようとしたのかを探る。特に、成瀬の女子教育観と当時の国家主義的良妻賢母思想のイデオログであった三輪田真佐子のそれとの比較的検討を通して、彼の特質の明確化を試みた。

日本女子大学校創立当初の成瀬の女子教育理念は、「人として、婦人として、国民として」であった。成瀬がこの「人」「婦人」「国民」の中、「人」を第一番目に位置づけたことは、彼の女子教育理念の構造が「人として」を根本に「婦人として」「国民として」を対置したものであり、彼はこの三方面から総合的に女性を教育しようとした。この理念の第一の特色は、従来男性の従属物とされていた女性の人格の独立と自由を認め、女性を人格的主体として教育するという点である。第二には、女性には女性独自の「使命天職」（社会改良）があるとし、女性を社会改良の担い手として教育するという点である。当時一般的には、成瀬の教育は、「人として」および「国民として」女性を教育するという点で従来の女子教育と異なっていると評されたが、特に、「婦人として」の理念の分析は重要である。①米国留学期、②梅花女学校校長期、③日本女子大学校創立準備期、④晩年の実現と構想と成瀬の学科組織の構想を見ると、そこには、時代によらず一貫して、彼が女性を家庭・教育・社会事業・実業・文芸等の多様な方面から、社会改良の担い手として教育しようとした特色が見られる。彼の構想の中、学科組織として実現されたのは家政学部、国文学部（文学部）、英文学部、教育学部、社会事業学部であるが、実業教育（商業・経済・農業等）は学科として組織されるに至らなかった。このことは、女性に対する当時の日本社会の要請が殊に家政・文学であり、実業方面は女性の領域と認められていなかった現実を示している。しかし、表面的には制約を受けざるを得なかったものの、この実業教育の彼の意図は、卒業生の団体である^{オウフウカイ}桜楓会（一種の生涯教育機関）に実業部（雑貨部・書籍部・牧畜部・園芸部・製菓部・銀行部）として実現されていた。成瀬の教育理念の第三の特質は、従来の儒教倫理に基づく女性観、および、

明治期の国民教育の指針であった良妻賢母主義の女性観に対して、国民としての女性を積極的に位置づけたことである。それまで、女性は家を守り家庭内でのみ活動することが協調されており、国家・社会に直接に関与する責任ある主体とは考えられていなかった。女性は、単に良き妻であり国家を担う男性の生産者・養育者として消極的・間接的な国民として位置づけられて来た。

周知のように、成瀬が日本女子大学校を創設した当時の最もポピュラーな体制側の教育思想は天皇制教育思想であって、その女性版は良妻賢母主義教育思想である。その結果、女性は天皇を頂点とする日本国家の臣民たる男性を生産し、且つ、補佐する人間として教育された。この「良妻賢母」は体制イデオロギーとして公認され、間接的な国家の担い手とするために女性にも初等・中等教育の必要が認められ、主として高等女学校という公教育のパイプや儒教的女訓を伝える私立女学校を中心に全国的に浸透し、女性の行動様式を規定していった。女子教育における国家主義的良妻賢母の典型的なイデオログの一人は三輪田真佐子であるが、『女鑑』はその立場を支持する代表的雑誌で、その執筆者たちは女子教育の根拠を儒教的女訓に求めている。成瀬は『女鑑』で批判されているが、それは彼が、①キリスト教主義学校の教師であったこと、②女性の社会的地位の向上を訴えたこと、③女子高等教育機関として日本女子大学校を設立することに対してであった。

三輪田の女子教育観は、日本に伝統的な儒教および日本の近代化の過程で創出された国家神道にその基盤を置く国家主義的良妻賢母に立ったものである。彼女の思想の主な特質は、儒教主義の男女の地位の差別を絶対的な天命の命令として受け入れることにあった。その道德観（女徳）の中心徳目は「貞操」と「従順」で、個的主体としての女性個人に立脚したものではなく、女性の家庭内での人間関係について言及するものであって、儒教的地位の差別を根拠に男性・夫・年長者に従う滅私奉公型の女性の育成を期待するものであった。また、女性の役割（「女子特別の身分」）を妻および母になることに規定し、その結婚観は夫婦の人格的關係に立脚した近代的結婚観とは相

対置されるものであった。更に、その教育観の基底は「女徳学」にあり、茶道・華道などの「才芸」は女徳を助長するとして奨励された。特に、普通教育（初等・中等教育のみ）は家族や国家に滅私で尽くす主婦としての任務を全うするためになされる教育として捉えられている。即ち、三輪田の女子教育観は、日本の伝統的特殊的価値を自然の掟とし、その型に女性をはめ込むことであって、人格的主体としての新しい女性の創造を目的とするものではなかった。このタイプは、当時の体制派の女子教育思想として最もポピュラーなものであった。

成瀬は1916（大正5）年に『新婦人訓』を出版したが、この時期はいわゆる大正デモクラシー期にあたり、教育の分野でも明治中期に確立した天皇制教育思想に基づく国民教育は、民衆の側からの教育要求の高まりによってその再編・修正・改革を迫られた。この状況下で日本女子大学校もその創立から15年を経過、平塚雷鳥を中心とする同校の卒業生たちは、1911（明治44）年には『青鞥』を出版、女性による女性解放運動の先鞭をつけた。いわゆる「新しい女」の登場である。それまで女性解放を唱えたのはキリスト教徒や社会主義者の人々であって、『青鞥』が良家のしかも大学出の女性の集まりであることが社会的な注目を集めた。しかし、それを契機に女子教育に対する世論は二分し、成瀬は日本女子大学校創設期に受けた伝統的女子教育思想擁護論者の側からの激しい批判も再度受けることとなった。彼が本書を出したのは、自らの真の女子教育の意図を改めて社会に公表する必要を痛感したからである。本書は日本の女性の精神的自覚を促す啓蒙の書であって、その主な論点は、①女性に対する偏見の誤謬、②女性の自覚の問題、③家庭と結婚、④女性の職業についてである。第一に、彼は女性にも研究能力があると、これまでの女性に対する偏見の根拠のなさを以下の三点にわたって批判した。①「習俗の偏見」は歴史的に作られたもので教育によって改めることができる、②女性の知性・能力は男性と比較して劣等であるとする一部の科学者の意見に、新しい科学的データを用いて、男女の能力の差別はないことを論証、③孔子やカント（I.Kant）、ショーペンハウアー（A.Schopenhauer）

といった東洋の聖人と西洋の哲学者の格言の呪縛を批判、文明の興隆と女性の能力には相関関係があることを指摘、その根拠の例をモンテッソリ（M. Montessori）等に求めている。第二に、①女性人間（人格者）としての自覚が大切である、②信頼関係、国民としての自覚が大切である、③宗教心が必要であると指摘している。ここには、成瀬の信仰に基づく個的主体としての人間、および、その人間の社会関係における共同を目指す教育の原理が明らかである。即ち、彼の教育の目標は個性の育成を基礎に据えながらも社会的連帯をも重要視した。第三に、家庭の根本を男女の人格的關係と捉えて、その結婚観・家庭観はキリスト教的人格の結合にその基礎を置いている。第四の職業観に関しては、彼は英語の *profession* の和訳を単なる「職業」ではなく、職業に神聖の意を加味して「天職（使命）」と訳した。そして、女性の役割を家庭内に限定せず公的職業につくことの必要性を説いた。

要するに、成瀬の女子教育観は、女性を人格的主体として考えたこと、女性の活動範囲を社会的に拡張した点において、三輪田真佐子のそれに代表されるような国家主義的良妻賢母とは、明らかな対比が見られる。しかし、彼は国家主義的良妻賢母を批判してはいるものの、当時の日本の状況から女性を中心とした家庭改良をも社会改良の基礎的視座に据えていたので、女性の妻・母としての役割も軽視しなかった。それ故、成瀬の「賢婦」は、「良妻賢母」という皮袋に新しい内容を盛り、女性観そのものを革新するものであった。

3. 日本女子大学校における教育実践とその成果

第三章では、成瀬の「主行主義」の教育論がカリキュラムや学生生活、学生の諸活動の中にどのように実践的に展開されたかを検討した。そして、女性解放を唱えた平塚雷鳥・奥むめお、平和運動の高良とみ・上代タノ、文学者の網野菊・田村俊子・宮本百合子・円地文子他、学者、政治家、実業家、音楽家、画家などの多彩な卒業生たちの人間群像を領域別に整理した。特に、日本で最初に創設された社会事業学部 of 卒業生の中から、谷野せつ（日本最

初の婦人工場監督官）・三田庸子（日本最初の女性刑務所長）・大平エツ（日本最初の女性女子少年院院長）の3名を選び、成瀬の教育との関連でその活動の特質に言及した。このような成果を通して、成瀬が彼独自のプラグマティズムの教育理念によって新しい社会形成のための主体の育成を試みた意義を論証した。

成瀬の「主行主義」の具体的教育実践は、先ずカリキュラムに見られる。その例は、①部門選択制度と科目選択制度の採用、②全体必修科目としての実践倫理講義と体育、③英語の教材による人間形成を重視して英文雑誌 Life（成瀬仁蔵・浮田和民・新渡戸稲造主幹）を発刊、④人文史講座と科外講演の開講である。第一に、成瀬は個人の主体性および成長を重視して選択制度をとった。創設期の科目選択制度は、当時の固定的履修制度の実状、また、同制度にたいする教師や学生の経験の乏しさゆえに徹底したものではなかったが、必修科目、選修科目（選択的必修科目）、随意科目（自由科目）の三種の科目群があった。各学生は必修科目以外に各自の要求・実力に応じて選修科目を選び、更には、随意科目をも選択することができた。この選択制度は1917（大正6）年に、部門選択制度と科目選択制度の新制度として実現した。ここでは、①固定した学部制が廃止され、文科（教育部、哲学部、国文学部、英文学部、文学部、史学部、社会学部、美術学部）、理科（数学部、理化学部、博物学部）、実学科（家政学部、師範家政学部、体育部、農芸部、商業部）の三学科部門が開設された。そして、全科目は必修科目と学生各自がその個性と能力に応じて自ら履修する選択科目に分類された。従って、学生は1年次は必修科目その他の選択科目を履修して自分の専修分野を決定、2年次より4年次までは所属の学部に属する主専攻科目を中心に学んだ。例えば、家政学部に属する人でも、興味があれば英文学でも国文学でも履修でき幅広い視野を培うことができるようになった。②自学自動主義的教育方針を更に徹底するため、学生の必要出席時間数は一週19-25時間へと縮小された。③修業年限は原則として4年であったが、3-5年に伸縮する自由が認められた。第二に、成瀬は人格と身体関係を重視し、彼の実践倫理講義

および体育を全体必修科目とした。ここには、成瀬が体育によって、self-mastery（「自動的意志の修練」「自治」）および行動する主体としての女性を育成しようとした意図を見ることができる。第三に、成瀬は英語の教材による人間形成を重視し、英語を全学必修科目とした。彼が英語を中心とした理由は教育ある女性に語学の社会的必要が増加することを考えてでもあったが、その主眼は英文のテキストによって、a) 修養上の好材料を得ること、b) 視野の狭い日本の女性に世界的見地を与えること、c) 英語的発想によって他の認識の仕方から自己を対象化させること等の目的があった。その一環として、1910(明治 43)年には英文雑誌 Life — A Periodical Magazine for Japanese Students of English が、成瀬・浮田・新渡戸を主幹として警醒社から発行される。同誌は隔月発行の雑誌で、毎号主幹による論説を掲載、内容は近代精神、精神の糧、意志と教育、芸術と文学、科学、世界の出来事、伝記、その他であった。第四に、成瀬は 1907(明治 40)年、従来の国文学部を文学部と改称、カリキュラムの大幅な内容改編を実行した。それは国文学を学ぶ者であっても国際的観点が必要であり、批判的精神が大切ということである。その結果、改編の力点は人文学を根幹として行われた。人文史は文学部の中心として位置づけられ、東洋と西洋の文学に精通し、それを歴史によって時系列的に系統づけ、文学と他の学科を学際的に研究するため開講された。この講座は欧米においては既に開講されていたようであるが、当時の日本では帝国大学においても開講されておらず、斬新な試みであった。

次に、成瀬の「主行主義」の教育実践は、学生生活の中に見られる。即ち、学生自治組織と全人教育の試みとしての寮舎教育である。開校時には現在のクラス委員のような代表者が活動していた程度であったが、徐々に学生の自発的活動によって実験的に「係」組織が生まれ、その後、全校的学生自治組織となった。この組織は学生の実力が養成されるに伴ってその内容を充実させ、運動会、研究発表会、展覧会、音楽会等の行事から修養会、瞑想会、クラス会等の会合に至るまで、全ての企画・実行は学生自らの責任の下に一任されるまでに成長した。「係」は時代によって変遷があるが、初期には修養

係、研究係、趣味係、整理係、農芸係、体育係、栄養係、代表者係、文芸係、記録係、編集係、会計係、経済係、特徴係などがあった。全学生は各自の興味に従って自由に「係」を選択し、少なくとも一つの係に所属した。この組織の機能は、学生は普段はいずれかの「係」を中心に活動し、例えば運動会のような行事が催される場合には、共同して全体的にその成果を発揮することであった。このような学生の自発的活動には、当時の良妻賢母主義の受動的女性像に対するアンチテーゼとして成瀬が提示した女性像、即ち「社会に活動する主体」の投影を見ることができる。また、この学生自治組織には「共同の精神の発揚」「思想の行動化」といった彼の教育の目的が端的に現われてもいた。

日本女子大学校の寮舎は単なる寄宿舎ではなく成瀬の教育の理想実現のための具体的実践的な場として位置づけられていたが、それは彼が米国留学中滞在した宣教師レヴィット (H.H.Leavitt) の家庭およびウェルズレー (Wellesley) 女子大学の寮舎がモデルになったと言われている。ここでの彼の教育の意図は a) 自治生活を訓練する場所、b) 家庭生活を改善する実験の場所および社会生活の仕方を学ぶ場所、c) 宗教的生命の養成であった。成瀬校長時代には28の寮があったが、これらの寮舎の中、キリスト教に基づいた生活を実践したのは、暁星寮(聖公会)、ブラックマー・ホーム (Blackmer Girls' Home, ユニヴァーサリスト) である。その他、晩香寮は外国人宣教師(ユニヴァーサリスト)が寮監をしていたので、そして、松柏寮・寒香寮はキリスト者の教授・平野はま子が寮監であったので、キリスト教主義の教育がなされていたと思われる。日本女子大学校の寮舎において、その生活の根本である宗教は、成瀬の学生各自が信仰を持つに至る前提としての「宗教的生命」の養成という方針から、大半の寮舎では聖書・讃美歌をそのより所としながらも特定宗教に限定することなく修養につとめていた。しかし、成瀬はキリスト教に限って、宣教師の寮監就任を要請、あるいは認めている。ここには、各宗教の中でも特にキリスト教を重視した成瀬のスタンスが明らかである。しかも、寮監が聖公会とユニヴァーサリストの宣教師であったこ

とは、成瀬のキリスト教諸教派の違いへの寛容な姿勢を裏付けてもいよう。

暁星寮は日本女子大学校開校の翌 1902（明治 35）年、英文学部教授・ヒューズ（Miss Hughes, 元英国ケンブリッジ高等師範学校長）の提案に、同学部教授・ミス・フィリップス（E.G.Philipps）が賛同し、彼女の母校であったケンブリッジ大学の同窓生の募金により日本女子大学校の学生のために、1904（明治 37）年に建てられた外寮（キャンパス外）である。その生活は設立当初より寮監・ミス・フィリップスの指導の下にキリスト教に基づき、朝夕の祈り、一週一度の聖書研究、英語研究の時間を設け、ミス・チョープ（D.M.Chope, 英文学部教授でミス・フィリップスの姪）がそれを助けた。ミス・フィリップスは英国の牧師の家庭に生まれ、10 歳の頃母と共に教会に行った時、「遠く世界に果てにゆき、神の教えを宣べ伝えよ」という父の説教をきき、幼な心に自分の使命を悟ったと言われる。ケンブリッジ大学ニューナムカレッジ卒業後、同大学で動物学を講義、リーフ島の動物に関する論文を英国ロイヤル・ソサイアティの出版物に発表した。その後、ビショップ・ビカステルに勤められ日本伝道を決意、1901（明治 34）年来日、日本女子大学校では創設期から第二次世界大戦勃発のため 1941（昭和 16）年に帰国を余儀なくされるまで、40 年余り英文学史、英国史、英会話の教鞭をとり、その一生は日本女子大学校の学生と共にあった。彼女の薫陶を受け、暁星寮からは上代タノや三田庸子等、隅の首石となって社会奉仕する多くの卒業生が世に出た。

ブラックマー・ホームは、1903（明治 36）年、同仁キリスト教会の宣教師、ミス・アズバン（C.M.Osborn）が米国ユニヴァーサリスト教会員の支援（特に Lucian Blackmer）を得て設立したキリスト教主義の女子学生寮である。この寮は最初は貧しい少女のために建てられたものであったが、東京に勉学しようとする女子学生のための女子寮としての機能を果たすようになった。特に、ミス・アズバンが日本女子大学校英文学部教授であったこと、同校と近距離の目白台に位置していたことから、日本女子大学校の寮生が大多数を占め、後に同校の外寮となった。ミス・アズバンはイリノイ州ワーレ

ンに出生、シカゴ大学を卒業後、1895（明治 28）年キリスト教宣教師として来日、同校では創設期から 20 年間余り奉職した。この寮からは、高良とみ等の卒業生が出た。

ところで、成瀬の教育の重要な根幹の一つは、教育を通しての社会改良、延いては、現実社会を改善する社会事業（社会福祉）の専門家の養成にあった。日本女子大学校における社会事業学部創設への理想の背景を一瞥すると、彼の教育における社会事業構想の基底は、彼がキリスト者となったことにあるが、その更なる発展は、彼の 5 年間におよび米国留学期においてである。米国で彼は社会事業の先駆者・タッカー博士に師事、より社会的関心を深められ、日記に「女（子）大学ヲ設立スルコト……社会学…… Helping woman 社会改良、慈善事業孤児院等ニ志アルモノヲ養成ス」とその決意を新たにし、当地で各種の社会事業施設を視察、その準備に入った。帰国後、1894（明治 27）年に梅花女学校校長となった成瀬は、普通科の上に専門科をおき、「社会の改良家將に慈善家たるべき人を養成せんことを期す」との見解を示した。梅花を辞した 1896（明治 29）年には『女子教育』の中で、女性の専門教育の主要分野として「社会改良家」「慈善事業家」の育成の必要を説いた。日本女子大学校開校と同時に全学必修科目として「実践社会学」を開講、1904（明治 37）年の教育学部開設に伴い「応用社会学」を必修科目とした。更に、『新時代の教育』では「理想指導の業務」即ち「学者、教育家、芸術家、宗教家、改革家、救済事業家」に大学院教育の必要を説き、社会事業を教育制度の中に位置づけている。その後の学科新編成の折には、文科社会学部の講座として「経済学、本邦法制、社会学概論、応用社会学、人類学、国勢研究、家族研究、婦人問題研究、慈善問題研究、児童問題研究」を採用した。晩年の「女子総合大学構想」では、宗教学科の中の社会学科として「社会救済事業家」の養成の必要、専門家の養成には大学院教育が必要であることを改めて強調している。しかし、このような成瀬の構想および実践にもかかわらず、当時は女性の社会事業専門家への社会の要請が熟していなかったために、彼の理想はその晩年に「社会事業講座」（生江孝之、全学共通選択科目）として結

実されたに留まった。その後、1921（大正10）年には社会の要請の機運が高まったこともあり、日本女子大学校では成瀬の意志を継いで第二代校長・麻生正蔵により社会事業学部（女工保全科・児童保全科、修業年限4年）が他大学に先がけて創設された。同校からは成瀬の教育の結果、社会事業学部創設以前から、その出身学部を問わず社会事業の分野に活動した卒業生が出たが、同学部創設以降、それが他女子大学に見られない女性に教師以外のエキスパートの養成を目指したことから、全国から問題意識をもった学生が集まり、福祉の専門家を養成することとなった。特に、社会事業学部女工保全科第2回生は、卒業生15名の中、谷野せつ（婦人工場監督官）、渡辺松子（YWCA元総幹事）、大平エツ（女子少年院院長）、賀来俊子（女子少年院院長）の他に、当時日本の植民地であった韓国からの卒業生として黄信徳（京城家政女塾、秋溪芸術学校を創設。女性問題研究会理事長、法律相談所理事長）や朴順天（韓国新民党前党主）などを輩出し社会参加の広がりを見せた。

本論文では、女性や年少者の更正保護に官の側から尽力した3名の卒業生を、成瀬の教育の成果の例として取り上げた。谷野せつ（1903-）は日本最初の、そして戦前・戦中を通して唯一人の婦人工場監督官（女性労働行政官）であった人である。彼女の一生涯の関心は、戦前・戦中は工場監督官として、戦後は労働省婦人少年局長として、一貫して社会的弱者である女性および年少労働者の人権擁護・労働条件改善に向けられた。日本女子大学校の4年間の学生生活で、谷野は、①良い教師に恵まれ専門的知識を得た、②社会の問題の所在を意識させられた、③宗教的 mission に目覚めさせられたと言う。彼女は在学中からクラスメートのキリスト者・渡辺松子に勧められYWCAの有職婦人部で活動したり、日曜日には教会に通った。卒業後はYWCAの翠香寮で生活し、キリスト教的な雰囲気の中で自己形成している。谷野が工場監督官として力点を置いて改善した点は、①女性および年少労働者の人身売買からの法的保護、即ち、子どもの人権の擁護、②妊娠婦および乳児の法的保護であった。彼女は女性の立場から当時の苛酷な労働の実態、人権の尊重されない状態を調査・告発し、それを行政サイドから地道に改善したが、

戦後、この努力は労働基準法に反映された。

三田庸子^{ツネコ}（1904-1989、家政学部）は戦後まもなく和歌山刑務所長に就任、日本で最初の女性刑務所長となった。三田は同校で、①ミス・フィリップスと出会いキリスト教信仰を得た、②人のために働くことを教えられた、③自己の意見を発表する能力を磨かれ、また話し合いの中でそれを軌道修正する大切さを学んだと言う。彼女が刑務所長として力点をおいたことは、①刑務所内に「至聖所」と名付けた祈りの場所をつくり信仰による女囚の人間形成を目指した、②女囚の釈放後の生活安定の手段として職業教育を重視した、③犯罪を社会の罪と捉え、刑務所内の環境改善に勤めた。例えば、栄養面、囚人服、刑務所やバス停の名称の転換、生理時の手当等である、④刑務所内で出生する子どもの人権の擁護から、刑務所外での出産を可能にした。

大平^{オオダイラ}エツ（1901 - 1983）は法務教官となり国立愛光女子学園（東京女子少年院）初代園長に就任、日本最初の女性少年院院長となった。同学園の教育は、初代園長・大平、第二代園長・賀来、第三代園長・長岡ツル（家政学部）まで、開園以来 25 年間、日本女子大学校の卒業生を中心に進められた。大平の教育の特色は、情操をたかめる教育（寮舎教育、キリスト教と仏教の宗教教育、動植物の飼育や栽培、興味を喚起する趣味の教育、体育などによる）、技術を得させる教育、社会との関連を自覚させるような教育内容およびその実践に力点を置き、子どもたち自身が自信をもって自活できるようなことを重視したことであり、成瀬の教育方針を継承したように感じられる。

さて、成瀬の時代には生涯教育という言葉自体はなかったものの、当時既に、彼は「生涯進歩する人」「人格の進歩」というそれを示唆する意図を示し、日本女子大学校内では、生涯研究機関およびその社会的実現の機関として桜楓会、修養による「人格の進歩」を目指す軽井沢三泉寮での夏期修養会を、社会活動としては通信教育の萌芽である「大学拡張」運動を構想・実現している。桜楓会は日本女子大学校の卒業生の団体であるが、その内容は一般に用いられる alumni association と異なり、一種の生涯研究機関およびその研究の成果を社会に実現する機関であった。創設期の事業として、①実業

部の開設、その目的は研究科生のために自活の道を開くことにあったが、同時に、会員および学生の経済思想を養い、労働を尊重し独立自営の精神を校風に加えるものであった。②『家庭週報』(The Home Weekly)『花もみぢ』、通信教育の textbook『女子大学講義』の発行、③一般女性に公開の婦人図書館(豊明図書館)の設立、④東京帝国大学基督教青年会と共に家庭購買組合設立、⑤夏期講習会、バザー、文芸会、慈善音楽会、格安実用品バザー等の開催、⑥共励夜学会の開設、⑦桜楓会巣鴨託児所の開設があった。

現在の大学通信教育は高等教育を受ける機会を広く社会に提供する大学開放の教育活動であるが、成瀬は1908(明治41)年、「ユニヴァーシティー・エクステンション大学拡張」の計画、その方法としての『女子大学講義』の発行を公表し、通信による女子高等教育普及の先鞭をつけた。彼は「大学拡張」によって、桜楓会のように日本女子大学校の卒業生のみを対象にしたものではなく、勉学はしたいが境遇がそれを許さない人にも高等教育の機会を与える試みを実践した。彼はその方法として、①校外講義、②図書館および巡回図書館、③巡回機械、④夏期学校、⑤講義録の発行、⑥大学植民地(セツルメント活動)を挙げているが、この中、巡回機械を除いては実践された。この成瀬の生涯教育の構想と実践は、戦後、日本女子大学通信教育部となり、教養特別講義などとも合わせて、今日に承継されている。更には、人間社会学部への社会人入学制度へと発展継承された。

成瀬の宗教を基礎とする精神教育の真髄は実践倫理講義と軽井沢三泉寮(1906年設立)における夏期修養会であったが、特に、軽井沢での修養会は目白の大学内での成瀬の講義の内容を、軽井沢という大自然の中で深化・体験する意味で重要であった。この修養会は大自然の中での人間を超えた者との対話を通して学生が自らの天職使命を自覚し、それを永遠に持続する力を得るための修養会として、同校の精神教育の重要な場であった。最終学年に属する学生は約1ヶ月間軽井沢で修養生活を送った。中でも、1917(大正6)年の成瀬による「軽井沢山上の生活」と題した講義は、彼の宗教教育のクライマックスとなった講義と言われている。

IV. 結語

成瀬仁蔵といえば、これまで良妻賢母の教育家、あるいは、世俗の財界人たちの協力を得て国家のために女子教育を進めていった女子教育家という印象で見られがちであった。また、キリスト教の立場からは、彼の宗教教育がどの宗教にも open であったが故に思想的根柢が曖昧な人との印象もあるが、しかし、本論文で考察したように、成瀬の場合は、むしろ、キリスト教と W. ジェームズのプラグマティズムとを結合させた独自の教育思想家、あるいは、その独自の教育思想によって新しい社会革命主体の養成を試みた女子教育家と言えるであろう。キリスト教は受洗以来、彼の精神の奥深く内面化され、それが梅花女学校、新潟英和女学校、日本女子大学校と、彼の生涯 40 年に渡る一貫した女子教育の仕事への動機ともなり、且つ、持続力ともなったのである。当時においては真面目に取り扱われなかった女性を教育して社会改良するために彼の生涯は捧げられたのである。また、彼自身は彼のモットーである「思即行」を自ら実践、明治知識人達との華やかな交友関係にもかかわらず私有財産も一切所有せず清貧な生活を送った。即ち、彼の人生そのものが「他者のために生きる」に貫かれていた。

もとより、当時の日本の天皇制国家体制下における国家主義的良妻賢母思想の要請が強かった状況では、女性を社会に開かれた個的活動主体として教育することは容易なわざではなかったと推察される。成瀬の場合も自己の教育方針と当時の教育の実情との間の相克は非常に大きく、彼の苦悩も一方ではなかったはずである。しかも、彼の生きた時代は現在のような私学に対する助成金のなかった時代、女子高等教育への国家の側からも一般人からも理解がなかった時代であったが故に、多くの資金を財界人より援助してもらう他なかった。また、長州藩士族の出身であったがために体制派の政治家との人脈も密接であった。そのような彼の交友関係はメリットでもあったと考えられなくもないが、その反面、彼の教育方針に制約を受ける、あるいは、対外的に真の主張を発表しにくく誤解を招くといったデメリットの側面も有し

ていた。

それにもかかわらず、彼の教育思想とその実践においては、本論文で考察した結果次のような成果を見いだすことができると結論づけられる。第一に、日本の教育思想の精神的土壌にあつて超越的・普遍的より所に立つ人格把握を内在化させ、使命観をもって社会に活動する個的主体の養成を今日のわれわれの教育の課題とするならば、本論文で扱った成瀬独自のプラグマティズムの教育の試みは、一私学の女子教育としと小さいながらも、課題を担いその目的達成を目指すものを内包していたと言えよう。第二に、今後の21世紀に向かつての多元主義的世界が模索される世界において、もしわれわれが自己の価値観を堅持すると共に、他者の多様な価値観をも寛大に認め得る人間を形成する教育を課題とするならば、成瀬の〈帰一〉思想はそれにつながる可能性を示唆していたと見ることができる。昨今のような国際化の時代にあつては、ますます価値の多元主義的観点は不可欠であるが、更に、国際平和の探究の根本的課題を例にとると、それは政治・経済・軍縮討議だけに任せず、人間を形成する教育にその基本的視座が求められているよう。

しかし他方、成瀬の限界を指摘するならば、特に日本女子大学校の宗教的多元主義の教育において、彼自身は「仏教は消極的の宗教であり、キリスト教は積極的の宗教である」と区別はしているものの、彼が絶対を排し寛容を尊重する立場からか、あるいは、調和的思考法からか、如何なる世界的宗教をも同じ価値があるとする彼のアプローチは、教育者としての配慮として認め得るものであるが、特に日本のような多神教的・汎神論的土壌においては、諸々の宗教の本質、神観、あるいは救いの意味などにつき学生に掘り下げて考えさせる機会を持たせずに通り過ぎさせることにもつながらないかと気になるのである。従つて、彼が人間の「意志」に積極的意義を見いだす時、彼自身はキリスト教による「自己否定」を踏まえての意志であり、それをくぐったヒューマンイズムであるが、他宗教の場合、成瀬が意味するものと相通じるか否かに問題が残るであろう。しかも、成瀬の場合、彼自身の宗教的立場を明示しないで宗教教育を実践したがために、彼の後継者の思想如何で日本

女子大学校の教育理念が変質していく可能性を内包していたとも言える。

以上のような近代日本教育思想史上における成瀬の教育は、彼自身のキリスト教とプラグマティズムに連結した人間観・世界観との深い関わりの中でなされており、また、教育の営みということを考慮する場合は、成瀬の教育思想は彼の生きた時代の課題に根ざしていることは言うまでもない。しかし、成瀬の教育実践の意義と限界を教訓にして、その双方を今後の教育に活かすことは可能である。

A Study of the Educational Thought of NARUSE Jinzo
—— His Pragmatism and Pluralism through Education
at Japan Women's University (Nihon Jyoshi Daigakkou) ——
(English Résumé)

Reiko Kageyama

Naruse Jinzo (1858-1919) is a distinguished Japanese educator who attempted to achieve a fundamental transformation of the traditional character of women with the aim of developing responsible, independent personalities and at the same time to enable women to play positive roles in the innovation of Japanese society. In this doctoral dissertation, I aim to clarify the vision and ideas of Naruse's educational thought by exploring its development and educational activities. Out of the traditional cultural soil of Confucian ethical thought, particularly that of Wang Yang-Ming school, he came to face the impact of Christianity and Pragmatism of William James. The later manifestation of these ideas on his educational activities at Japan Women's University, the school which he started in 1901, will be explored and described. This analysis of Naruse's educational thought will place him within the context of the history of modern Japanese educational thought; it also throws light upon the issues of how to develop educational ideas and practice for personality and character building.

This dissertation consists of two main parts; in Part I, I focus on Naruse's thought and in particular his view of human nature. This analysis delves into the innermost core of his educational thought. In Part II, I turn to an analysis of his educational thought, as it is expressed in actual practice at Japan Women's University. Thus, the thrust of my investigation has a dual focus: an in-

clusive study encompassing both his philosophical ideas and his educational thought (theory and practice).

First, in Part I, under the title of ‘The Development of Naruse’s Thought and “Concordia” (“Kiitsu”) as his Pragmatism and Pluralism’ , I delineate Naruse’s early life in the context of its historical background. I explore the development process of his attitudes and values as they evolved over time. This can be depicted schematically in the following way: [traditional thought → Christianity → (Unitarianism) → ‘Concordia’]. Special attention has been paid to the central axis running through his value system which integrates the various strands of his thought into a unified whole. The study proceeds by following these two questions: (1) how were the indigenous universalistic and humanitarian elements in his early thoughts transformed and developed with the impact of Christianity? (2) how did his ideas undergo further transformation in his experiences in the United States after he received the impact and influence of the ideas of Unitarianism and Pragmatism of William James? Such exploration throws some important light upon Naruse’s original thought, and its subsequent transformation.

In Chapter 1 of Part I, under the title of ‘Naruse’s Traditional Thought and his Conversion to Christianity — Negation of Selfishness (“self-negation”) and Moral Practice’ , I examine the following three points. (1) What are the characteristics of Naruse’s value system in his traditional thought [the Yomeigaku (the moral teaching of Wang Yang-Ming, a Confucian school)], an Oriental thought which has some similarity with Christianity? (2) What innovations did Naruse’s traditional philosophical ideas undergo after he became a Christian in the Congregational denomination? In particular, I examine here continuities and discontinuities in Naruse’s thought, and point out that his understanding of human nature derived from his understanding of the Christian concept of the transcendental and absolute God. This led to his rec-

ognition of the 'sinfulness of human beings' and the quest for altruism through struggling with his inner self. (3) What were Naruse's activities when he served as a pastor of the Yamato Kooriyama Congregational Church and Niigata First Congregational Church, and as a teacher at Baika Girls School, Niigata Girls School, and Hokuetsu School? His experiences and practices at these Christian educational institutions demonstrate and precede the educational philosophy which he developed and organized more systematically in later practice at Japan Women's University. His original spontaneity in developing educational methods, openness to receive cooperation with foreign missionaries, and the financial independence as a Japanese educational institution are notable characteristics of his practice and policies.

In Chapter 2, 'The Impact of Pragmatism on Naruse's Thought', special attention is paid to the development of his views on 'Concordia'. During his studies in the United States (1890-1894) at Andover Theological School and at Clark University, Naruse's Christian ideas were somewhat transformed towards openness to Unitarian trends. As a result of 'Andover Controversy', which debated the orthodox ideas of Calvinism, including the question of salvation of people of other faiths, Naruse received some influence from Unitarian thought. He was also influenced profoundly, he says, by the philosophy of William James, which at its deepest levels, contains some unorthodox ideas. Naruse's educational thought which combined Christian ideas with Jamesian Pragmatism laid the foundation for his idea of 'Concordia'. By clarifying the impact of James on the thought of Naruse, I tried to look into Naruse's insights and further development on the understanding of historical and universal problems.

In Chapter 3, 'Development of "Concordia" as his Pragmatism and Pluralism', the main points of inquiry are: (1) how does Naruse's theory of the innovation of human beings and that of society express themselves in his

'Concordia' views? (2) and what are the structural characteristics of his pluralism? I will also try to clarify Naruse's intention in adopting the word 'Concordia', and analyze his concept and understanding of it. This concept is expressed in his lectures on 'Practical ethics' at Japan Women's University, and provides a key to understanding his educational thought. In this chapter I also deal with 'The Association Concordia', the organization which Naruse founded, in cooperation with Shibusawa Eiichi and other prominent figures in Japan and abroad in 1912. In short, the intention behind the founding of this association was to seek the building of social solidarity and international cooperation through religious understanding. I compare the viewpoints of Naruse and Shibusawa, and point out their respective differences.

Next, in Part II, 'Naruse's Educational Thought and Its Manifestation in Practice at Japan Women's University', I examine the significance and implication of Naruse's ideas as they manifested themselves in actual practice in tackling the problems of higher education for women in prewar Japan. I concentrate on the following three topics: (1) Naruse's pragmatic theory (which he expressed as 'shugo-shugi' — 「主行主義」); (2) his view of women's education in particular, as expressed in the school system and curriculum at Japan Women's University; (3) the actual educational practice and methods of his pragmatic educational theory.

In Chapter 1 of Part II, 'The Orientation Theory and Methodology in Naruse's Educational Thought', I clarify how James' Pragmatism was expressed in Naruse's educational activities. Naruse was in agreement with James on points concerning religion, and applied it to his educational theory as (1) a formative principle in the development of an individual; (2) a fundamental principle of social cooperation. Naruse's aim was the formation of an autonomous, harmonious personality (a 'useful, active person') who develops one's own scientific creativity based on a religious ethos and the ability to

practice it. In this way he sought to overcome the pressing social problems that faced the rapidly changing society of the late Meiji and Taisho periods. Special attention is paid to Naruse's original contribution to a learning method of 'Impression, Construction, Expression,' as well as the formation of religious life. These were outcomes of a methodology deduced from the aims inherent in 'shugo-shugi,' which undergirded his educational thought.

I turn in Chapter 2, 'The Characteristics of Naruse's View of Women's Education', to give a brief treatment of the establishment of Japan Women's University. Then, I investigate the following problems: (1) how Naruse tried to create a new type of emancipated woman; (2) how he tried to overcome the stifling ideology of 'ryosai-kenbo' (good wife, wise mother) through an opposing thought based on humanism. I pay special attention to the contrast between Naruse's views and the 'ryosai-kenbo' ideology which was emphasized as the traditionalistic concept of womanhood by the nationalistic reactionary educational leaders of that period. I clarify Naruse's ideas in this section by comparing and contrasting them to those of Miwada Masako, who was one of the strongest advocates of the 'ryosai-kenbo' ideology.

In Chapter 3, 'Educational Practice at Japan Women's University and Its Graduates', I turn to the following themes: (1) Naruse's 'shugo-shugi' realized itself in the curriculum and in student life at the institution, for example, extra-curricular activities, voluntary activities outside of the campus, publications by students, graduates' study program and alumni association as life-long educational activities; (2) the establishing of a pioneering Division of Social Work as well as the inauguration of a system of correspondence education (life-long education). To demonstrate the effects of his educational thought, I take up three representative individuals who graduated from the school as case studies. First, Tanino Setsu, who became Japan's first and only prewar and wartime woman administrator in Industrial Management; second, Mita Tsuneko,

who was Japan's first woman prison superintendent; third, Oodaira Etsu, who became the first woman superintendent of a juvenile reform school in Japan. All three played pioneering roles in the field of social work in Japan.

In summary, in Part I, I depict Naruse as a man whose central motivation developed out of his Christian beliefs and pragmatism; and in Part II, I analyze his educational theory, 'shugo-shugi', and demonstrate how these ideas expressed themselves in actual practice at Japan Women's University, which, produced many women who contributed to social welfare throughout the country. Naruse can thus be portrayed as a unique Japanese educator who combined his Christian beliefs with Jamesian Pragmatism to cope with the social issues of his day. Furthermore, though his educational thought was in response to the social issues of his day, a study of his thought provides insights and perceptions for contemporary society to deal with the issues and problems that confront us today.